

## 神奈川大学横浜キャンパスのCALL教室について —現状、そして未来に向けて—

言語研究センター所長 岩畑 貴弘

神奈川大学横浜キャンパスの最も奥まったところに20号館があり、そのさらに3階に「言語研究センター」はある。そんな奥まったところであれば、さぞかしのんびりゆったりとした時が流れているだろう、という大方の予想を裏切り、大きくふたつの柱を持つ業務に追われ、言語研究センターは大変忙しい場所である。柱のひとつは、研究所として所員の言語に関わる研究をサポートすること、そしてもうひとつは本学の学生の語学学習のサポートをすることである。学生の語学学習サポートのため、いつでも好きな時に海外の映画やドラマなどを見て外国語や異文化の学習ができる「語学視聴覚室」があり10のブースがある。また、センター事務室の向かいにはスタジオとビデオ編集室があり、これは研究用途にもそして教育用途にも使用される。また、研究サポート用に比較的大きな書庫もセンターにはある。

これだけでも十分に大所帯と言えるが、神奈川大学の言語研究センターの大きな役割に「CALL教室の運用」がある。それは大学が定めた「言語研究センター規程」の第3条(6)にもはっきり記載されているとおりでである。

CALLとは Computer-Assisted Language Learning の略で、いわゆるLL教室のLL機器をコンピュータ化したようなものである。つまりLLの機能を、PCにインストールされた複雑なソフトで制御し、教員用PCと各学生用PCがLL端末として機能させるものであり、それによって通常のLL教室や通常のPC教室とは全く異なる、高度な語学学習が可能となる。例えば、席が離れたところでの動画付きの会話練習はもちろんのこと、モデルとなる音声ファイルやビデオファイルをPC上で自在に操りながら、自らの声を合わせて録音しながら繰り返し練習したりできる。



語学視聴覚室 視聴風景



20-319教室

もちろん教員はそうやって録音した音声ファイルを個別に聞いて指導したり、あるいはよくできた学生のもを他の学生たちに聞かせて練習させるなども可能である。外国語学部生はじめ、語学を真剣にマスターしたい学生には必須の設備となっており、学生の評価も高い。

センターと同じフロアの20号館3階にはそのCALL教室が実に10教室並んでいる。いくら神奈川大学の外国語学部が1学年定員450人の大所帯とはいえ、10教室は相当な数で、これほど多くのCALL教室が並んでいる大学もそう多くはない。私の任期中だけで東京や神奈川のいくつかの大学に見学に行ったが、有名な大学でもこれほどの数のCALL教室にはついぞお目にかかったことはない。

しかし、神奈川大学のCALL教室の真に素晴らしいところは設備が整っていることでなく、その稼働率が非常に高いことである。以下の表をみていただきたい。

2017年度後期CALL教室稼働率(1-4限)

	開講授業数	稼働率
月	24	60%
火	36	90%
水	18	45%
木	29	73%
金	29	73%
合計	136	68%

年度や学期によって多少の変動はあるが、70%程度の高い稼働率を誇っている。1限も含めての数字であるため、実際10教室がすべて埋まる時間帯も2017年度後期では火曜日3限、木曜日2限、金曜日3限の3コマも存在する。私もCALL教室を1コマ使わせていただいているが、CALL教室を使うのは鍵を借りたり機器をスタートしたり、最後は機器の電源を落としたり鍵をかけたりと面倒が多い。もちろん、機器の操作が難しいことは言うまでもない。PCの操作ができる人でもCALL

機器の操作を一通り理解するのは一苦勞である。そんな、言ってみればハードルの高いCALL機器を使って授業にまい進してくださる先生方がこんなにも多いのは大いに驚かされる。私が所長を務める前からずっとこの稼働率らしいが、機器を使って一生懸命授業を展開される先生方にも、またそういった先生方に絶え間なく働きかけてCALL教室の稼働率をここまで上げてこられたセンターに脱帽するしかない。

さて10教室もあると老朽化に伴う機器更新もまた一苦勞である。サーバー、教員用ならびに学生用のPCを中心としたシステムであるため、PC自体の寿命並びにメーカーの部品保有年数、あるいは使用OSのセキュリティ対策上の問題で、本当は5-6年で機器更新するのが理想的である。が、決して安価ではないシステムであること、またセンターでは普段のメンテナンスにも力を入れて大切にシステムを使用していることから、耐用年数を7年としている。そして7年が経過する時に機器更新するのだが、基本的には二教室をペアにして更新している。そしてここ最近では文科省の補助金（ICT活用推進事業）を運営委員ならびに事務局一丸となって獲得し、整備にこぎつけている。

入れ替えに際しては、業者から相見積もりを取得し、もっともよい提案をしてくれた業者とともに作り上げるわけだが、当然センターでもより良い次世代のCALL教室をつくるべく、他大学のCALL教室の見学を行っている。2015年度には慶応大学日吉キャンパス、2016年度には専修大学生田キャンパス、そして今年度には東京大学駒場キャンパスならびに東京海洋大学品川キャンパス、そして別の機会に神田外語大学を見学させていただいた。タブレットを使用して授業を行う大学もあったが、それはまだ開発段階で使用できる機能も通常のPCを使用したシステムよりずっと簡素化されていた。



慶応義塾大学日吉キャンパス  
外国語教育研究センター CALL 教室

さて、現在横浜キャンパスではHPでも発表されているとおり、みなとみらい地区に新キャンパスを開設する準備をしている。そこに新学部含め神奈川大学の国際系学部を集約する予定である。そうなれば当然そこでは語学教育が大きな柱のひとつとなる。センターのアピール不足のせいで学内でも誤解をお持ちの方が多く、言語研究センターは教育の中身そのものには一切かかわっていない。教育内容を決定し、教育を行うのは当該科目が専門科目であれば各学部そして当該科目が共通教養科目であれば外国語教育部会である。センターはあくまで CALL システムを備えた教室を運用しているだけであり、教育内容にかかわることを検討することもなければ、その会議に参加することもない。そういった役割を十分認識したうえではあるが、現状の横浜キャンパスにおける CALL 教室の数と高い稼働率を見たときに、みなとみらいキャンパスにおいても、やはり CALL 機能を備えた教室（それはもちろん CALL 教室というより、多目的教室でも全く問題ない）が必要であることは明らかに思われる。

それを当初より考え、センターではみなとみらいキャンパスが具体化してくるかなり早い段階から要望書という形で大学上層部に CALL 機能の実装の提案をしてきた。2017年3月、7月そして11月である。直近の11月のは、外国語学部そして外国語教育部会と話し合い、連名で要望書を提出した。上述の通り、教育内容をうんぬんする



東京大学駒場キャンパス  
駒場アクティブラーニングスタジオ (KALS)

立場ではセンターはないので、あくまでサポート的にである。

現在まで、なんら公式の返事はないため、どうなっているか当センターからはよくわからないが、時折、CALL 教室・設備をめぐる意見・疑問は漏れ伝わってくる。伝わってくるだけで、それにセンターとして返事をする機会がないため、この場を借りて説明させていただく。

まずよくあるのは、備え付けのデスクトップ PC やノート PC を用いるより、タブレットを用いた CALL システムを使えば学生の使い勝手もよく、また費用も抑えられるのではないかというご意見である。将来的にはそういう方向性もあるが、現状ではタブレットを用いたシステムはまだまだ開発途中の段階である。またタブレットに必須の無線通信は、通信の安定性が大きなネックとなり、現段階では不可能と言える。

CALL 教室を整備するには多額の費用がかかるが、その費用をかけるよりネイティブスピーカーに授業をお願いしたほうがよいのではないかというご意見も耳にする。専門科目ならびに外国語科目両方においてネイティブスピーカーによる授業はすでに行われており、さらに増やす必要性については賛否両論であろう。また、費用に関してだが、CALL 教室使用の大半を占める英語においてネイティブスピーカーを大量に雇うのは予算が相当かかり、7年使用できる CALL 機器を整備するより高くなってしまふ。

大学が教室内に一齐にPCを準備するのではなく、学生が自分のPC等の機器を持ちこんで（いわゆる「Bring Your Own Device」）それを使ってCallの授業を行うべきではないかというご意見も聞く。単に情報教室・PC教室としての使用ならばBYODも可能かと思われるが、語学習得を目的としたCALLシステムはサーバ設置とサーバソフトそしてクライアントソフトが複雑に絡み合ったシステムであり、現時点ではBYODは残念ながら不可能である。

新キャンパスではどの程度のCALLを必要とする科目が開講されるのかという疑問もいただく。もちろんそれは定かでないが、現在のCALL教室の使用頻度から推定は可能である。現在の使用数は（数字は2016年度の前後期平均）、英語英文学科専門科目は47コマ、スペイン語学科専門科目は2コマ、中国語学科専門科目は10コマ、国際文化交流学科専門科目は9コマ、外国語科目（英語）は60コマ、外国語科目（その他の外国語）は14コマ、の合計142コマがCALL教室で行われた。そのほか、他学部のものもいくつかある。新キャンパスには、外国語学部英語英文学科・スペイン語学科・中国語学科が移転、その他、国際文化交流学科をその一翼とする新学部が定員を増やして移転する。センターのシミュレーションによると、それだけでも108コマはCALL教室を必要とする。数が現在の横浜キャンパスより少ないのは、外国語学部以外の学生を対象にした授業も現在CALL教室で行われているためである。これだけで7-8程度の教室が必要だが、これに経営学部がさらに加わるため、やはり最低8教室は必要である。

予算がいくぐらい必要なのかという疑問もいただく。3年後のことは確たることはもちろん言えないが、現在言語研究センターでは2018年度末にふたつのCALL教室の機器更新を目指し学内予算を申請中である。そこでは、これまでよりも

ずっと使いやすいようにノートPCを使用したCALLシステムを提案している。またアクティブラーニング室としても使用可能なように、机は可動式とし、ノートPCは机に収納可能にしている。また電子黒板も備えている。それでも節約に励み、機能の絞込みをして、これまでにかかっていた費用の2/3、すなわち1教室2000万円以内に抑えることが可能となった。もちろん、上述のように3年後までにタブレットを使用したり、無線LANを使用したシステムが確立されればもう少し安価になると思われる。なお、当然のことではあるが、同様にセンターのシミュレーションでは、外国語学部が新キャンパスに移転するまでの2020年度末までは現在の10教室体制を維持する必要がある。しかし、2021年度からは4教室程度で十分となるので、長い目で見ればその6教室減の予算を新キャンパスの8教室のCALL機器整備に回せば、新キャンパス開学後もこれまでより大幅に整備・維持予算が必要ということはない。

以上、私がセンター所長になってから行ってきたセンター関連業務のうち、かなり多くの割合を占めてきた「CALL教室の運用そして整備」について積み重ねてきたものをこの機会にまとめとして書かせていただいた。今後の運用そして整備のための資料として何らかお役に立つことを期待する。もちろん、これから皆様のご理解をいただきながら、言語研究センターとして学生の学修に役に立つよう尽力していく所存であり、ご理解・ご協力を賜れば幸いである。



みなとみらいキャンパス 完成イメージ図



---

# Back at Munich's Ludwig Maximilian University: a few musings

Stefan Buchenberger

I first entered Munich's Ludwig Maximilian University (hereafter LMU) in 1985, foolishly thinking that I would study chemistry. Since that didn't work out so well, I changed my major to Japanology, little knowing what lay ahead for me. After getting my Master's degree in 1993 I moved to Japan in 2000, where I finished my doctoral dissertation on Tanizaki Junichiro and Thomas Mann, finally getting my degree in 2004. As the title of my thesis suggests I was already drifting towards comparative literature, a field where I could continue with my favorite subject: the study of graphic fiction. Over the years I stayed in contact with the Institute of Comparative Literature, and when I got approved for a year of research abroad the head of the Institute, Prof. Stockhammer, kindly agreed to be my supervisor. So, after 17 years in Japan I went back to my alma mater this time as a professor and not a student. And after working at various Japanese universities for 17 years, being back at a German university I strongly felt the differences between the two countries' educational systems, which are what I'm going to do a bit of musing about.

First of all, LMU is rather big, and while Kanagawa University, with its more than 18,000 students, is by no means small, an institution with more than 52,000 students is

in a different category. LMU is after all Germany's second largest university, with 18 faculties and more than 700 professors. LMU has, of course, quite a number of Japanese partner universities, and many Japanese who studied there became prominent figures in Japanese society, one example being Mori Ogai.

LMU is also quite a bit older than Kanagawa University, being originally founded in Ingolstadt in 1472, before relocating to Munich in 1826. Like almost all other German universities LMU is public, meaning that there are no student fees, a fact that will probably make Japanese students very envious. And what probably will make them even more



LMU main building at Geschwister-Scholl-Platz  
Picture: Wikiolo, License: CC BY-SA 3.0-de,  
([creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/de](https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/de))  
via Wikimedia Commons: [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:2017\\_LMU\\_2.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:2017_LMU_2.jpg), accessed  
January 8th 2017



Chinese Tower, Picture: Sven Teschke  
License: CC BY-SA 3.0-de, ([creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/de](https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/de))  
via Wikimedia Commons, [https://de.wikipedia.org/wiki/Englischer\\_Garten\\_\(München\)#/media/File:2012-07-17\\_-\\_Landtagsprojekt\\_M%C3%BCnchen\\_-\\_Englischer\\_Garten\\_-\\_Chinesischer-Turm\\_-\\_7362.jpg](https://de.wikipedia.org/wiki/Englischer_Garten_(München)#/media/File:2012-07-17_-_Landtagsprojekt_M%C3%BCnchen_-_Englischer_Garten_-_Chinesischer-Turm_-_7362.jpg), accessed January 8th 2017  
For more information about the LMU visit: [www.uni-muenchen.de](http://www.uni-muenchen.de)

envious is that there really aren't any entrance exams. Almost the only thing that you really need are your grades from high school. Apart from membership in the so-called Excellence Initiative, a government program that provides special funding for the best universities, there is also no real ranking of German universities. (LMU, by the way, is part of the Excellence Initiative.) It doesn't really matter where you study, only what and whether you get good grades or not. And while the university of course provides help for finding jobs there is no institutionalized job hunting as in Japan. Students can concentrate on their studies and not be distracted by job hunting; they are, on the other hand, responsible for finding their own career path. Of course, not everybody

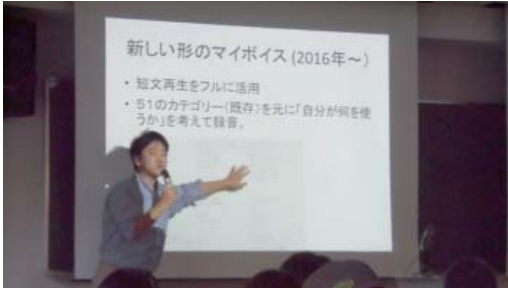
graduates, but in Germany it is absolutely possible to get a good job without having graduated from university.

All these differences in the educational systems of Germany and Japan were once again made clear to me when I taught a seminar in comparative literature. As German students are expected to be responsible for their own futures once they enter university – with many moving out of their parents' home when they do so – they are, as a whole, more independent than Japanese students. This, by the way, is not meant as a critique of Japanese students: it is a simple statement of a fact that results from the aforementioned differences in the educational systems. A higher level of student independence translates into more interaction in class, which I found quite a refreshing change. Finally, I was reminded how much I had missed LMU's wonderful location in the center of Munich, right next to the city's largest park, the so called English Garden (Englischer Garten), which took traditional English landscape gardens as its model, and which opened to the public in 1789. Its most popular beer garden is situated at the so called Chinese tower, the perfect place to relax, sometimes even together with students, after a long day in the library or seminar.



[https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/e/e2/Sigillum\\_Universitatis\\_Ludovico-Maximilianeae.svg](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/e/e2/Sigillum_Universitatis_Ludovico-Maximilianeae.svg)

## 【 講演会報告 】



11月15日に慶應義塾大学言語文化研究所准教授の川原繁人氏をお招きして、「マイボイス：社会と言語学の接点を目指して」というタイトルで2017年度講演会を開催することができました。当日は、「音声学Ⅱ」の履修者を中心に、それ以外の学生や教員も含めて、124名が参加しました。ご講演では、マイボイスをテーマに、言語学・音声学がどのように社会に貢献できるかをお話いただきました。

マイボイスとは、ALS等の神経性の難病などで自分の声を失う患者様が、声を失う前に日本語の基本モーラを録音しておき、それを再生するソフトウェアです。HeartyLadderというキーボード入力支援ソフトウェアから音声を再生することができます。マイボイスもHeartyLadderも、無償で、操作・録音が容易なので患者様と介護者様だけで使用することができます。

もともと、HeartyLadderは、ご自身が脳性麻痺患者であるプログラマの吉村隆樹氏が開発され、マイボイスは、吉村氏と作業療法士の本間武蔵氏が開発し使用されてきました。その後、音声学である川原氏が関わるようになりました。

マイボイスは、他の音声合成ソフトと異なり、「自分の声で話す」ということを大切にされたソフトウェアです。ご講演では、数名の患者様のインタビュー映像などを通して、なぜ自分の声なのかをお話いただきました。自発呼吸が難しくなっ

た場合には、気管切開をして人工呼吸器をつけて（＝声を失って）生きるか、死を待つかしかありません。その状況で、実際に多くの患者様は死を選んでいるという現実があります。しかし、マイボイスを知って気管切開を躊躇なく選べた患者様がいます。また、自分の声で話せるということは、ご本人だけでなくご家族にも大きな喜びです。マイボイスは、患者様やご家族・看護する方のためのもので、患者様と介護者様が共同で作りに上げていくものなのです。

そのマイボイスについて、言語学者・音声学者は、音質改善に貢献できます。音声の基本的単位であるモーラの音量調節、音の長さの調節、高さの調節、波形の切り出し方、また、Praatという音声分析ソフトウェアによる処理、アクセントと高さの関係、「は行」音の切り出し方などについて、これまでに協力してきたことが紹介されました。また、脳性麻痺の患者様が明瞭に発音しようとする例では、調音点や調音法のような音声学の知識が医療の現場で使われていることも紹介されました。

講演後には、活発な質疑応答がありました。また、後日提出されたレポートでは、言語学・音声学が役に立っていることを知ることができて良かったなどのコメントが多く寄せられました。

マイボイスのワークショップが、年2回程度、慶應義塾大学で開かれているので、関心のある方は参加してみたいかでしょうか。また、川原氏は、音声学を様々な側面から紹介する入門書も執筆されていますので、関心のある方はご覧下さい（『音とことばのふしぎな世界：メイド声から英語の達人まで』[岩波書店、2015]、『「あ」は「い」より大きい!?：音象徴で学ぶ音声学入門』[ひつじ書房、2017]）。  
(文責：小松雅彦)

## 『良友』画報と上海の文学研究

孫安石／村井寛志／中村みどり／大里浩秋(名誉教授)／山口建治(名誉教授)

『良友』画報を取り上げた本研究は2015年から3年間にわたり学内共同研究(『良友』画報と東アジアの都市文化に関する共同研究)に採択され、今まで活動記録をすべて掘り起こし研究会のブログ<http://liangyou.jugem.jp/>に内容を一般公開している。以下、2016年10月以降の研究会の活動を記す。

### (1) 第59回『良友』画報研究会

日時：2017年2月20日(月曜日)

場所：神戸学院大学ポートアイランドキャンパス・D号館3階アクティブスタジオ

主催：『良友』画報研究会

司会：森平崇文(神戸学院大学)

(一)「梁得所と『良友』画報」菊池敏夫(神奈川大学)

(二)「『良友』画報から『大衆画報』へー編集者梁得所の軌跡」森平崇文(神戸学院大学)

(三)「『良友』と全国撮影隊ー中国の自己発見」孫安石(神奈川大学)

(四)「『良友』画報の画家たち」呉孟晋(京都国立博物館)

コメンテーター：村井寛志(神奈川大学)、高綱博文(日本大学)、石川照子(大妻女子大学)

### (2) 第60回『良友』画報研究会

日時：2017年5月13日(土曜日)

場所：神奈川大学横浜キャンパス 20号212室

共催：『良友』画報研究会、日本上海史研究会

(一)「上海フランス租界の鉄門(1925-1946)

について」馬軍(上海社会科学院、歴史研究所)

(二)「日中戦争と『華北映画』雑誌について」張新民(大阪市立大学)

コメンテーター：村井寛志(神奈川大学)、高綱博文(日本大学)、石川照子(大妻女子大学)、孫安石(神奈川大学)、菊池敏夫(神奈川大学)

### (3) 第61回『良友』画報研究会「いまなぜ上海研究か？」

日時：2017年5月27日(土)

場所：神奈川大学横浜キャンパス 1号館804会議室

共催：『良友』画報研究会、非文字資料研究センター

司会：孫安石(神奈川大学)

(一)「近代上海の公園と都市への展開」熊月之(上海社会科学院、歴史研究所)

(二)「上海と港湾の研究について」戴鞍鋼(復旦大学)

(三)「上海のフランス租界と日本建築」陳祖恩(東華大学)

コメンテーター：熊谷謙介(神奈川大学)、菊池敏夫(神奈川大学)、石川照子(大妻女子大学)

### (4) 第62回『良友』画報研究会「上海租界と外国人社会について」

日時：2017年10月28日

場所：神奈川大学横浜キャンパス 3号館406室

主催：神奈川大学『良友』画報研究会



共催：神奈川大学非文字研究資料センター・上海  
社会科学院歴史研究所

司会：孫安石（神奈川大学）

（一）「上海のユダヤ人研究の最新動向について」  
王健（上海社会科学院歴史研究所）

（二）「日本軍政下の上海におけるユダヤ絶滅政  
策の存否をめぐる」菅野賢治（東京理科大  
学）

（三）「上海のフランス語新聞 Le Journal de  
Shanghaiにおける日・仏・中文化交流」趙  
怡（東京工業大学非常勤講師）

（四）「ドイツの版画と上海の魯迅」東家友子（東  
京大学大学院博士後期課程）

コメンテーター：熊谷謙介（神奈川大学）、大橋  
毅彦（関西学院大学）、菊池敏夫（神奈川大学）、  
石川照子（大妻女子大学）

上記の第61回と第62回の例会の詳細について  
は、神奈川大学非文字資料研究センターの『非文  
字資料研究』を通して報告し、2018年3月を目  
標に『良友』画報を主な内容とする研究論文集（勉  
誠出版）を刊行することを目指している。



## レアリア学習からみた外国語学習語彙の研究

堤 正典 / 小林 潔

この共同研究では、これまでのロシア語のレア  
リア（文化的背景などの知識）の教育についての  
研究する過程において、学習語彙の見直しをする  
ことの必要性が浮かび上がり、ロシア語の学習語  
彙の再検討を行っている。

ロシア教育科学省認定ロシア語試験（ТРКИ）  
の学習語彙を基盤とするが、それは主としてロシ  
アへの留学生が必要とする語彙を中心としている  
ので、日本人がロシア語を使用するその他の様々  
な場面を想定して、ТРКИ学習語彙に含まれない  
必要な語彙の洗い出しを行い、学習語彙リストの  
改訂を目標としている。

また、ТРКИ学習語彙リストには多義語が含ま  
れ、日本語との対応が複雑な語も少なくはない。  
例えば、ロシア語のжизнь（生命、人生、生活…）  
は英語ではlife、フランス語ではvieというよう  
に一語で対応するが、日本語に対してはそうでは  
ない。学習語彙の多義性に注目し、日本語を母語と  
する学習者（日本人学習者）のために日本語との

対照分析を行っている。

学習語彙リストの見直しにおいては、まずロシ  
アにおけるビジネスの場面、あるいは来日したロ  
シア人のアテンドの場面などを想定して、必要語  
彙（必要表現）を検討している（なお、その際  
にはいわゆる高度な専門用語は除外する）。また、  
ロシアの外国人労働者に求められる言語能力や文  
化・歴史・制度の知識が、ロシア政府による「外  
国人労働者向けロシア語・ロシア史・ロシア方試  
験」で示されている。日本人学習者にとってもレ  
アリア知識として知っていることが望ましいもの  
である。これに含まれる語彙も学習語彙とする必  
要があると考える。

多義語については、より基本的な語から多義性  
についての検討・分析を行っている。その際、ま  
ずは英語の多義語分析を参考とすることができる  
ので、英語との多義性の対応がある語から分析を  
行っている。

---

## 中国語初級教科書の語彙分析と応用

加藤 宏紀 / 松村 文芳

本研究は、中国語初級の使用書について、語彙面から詳細な調査および分析を行い、主に中国語の専門教育における体系性をより高めるための基礎データを構築し、活用することを目的としている。

現在、中国語演習Ⅰで使用している教科書のうち、『ポイントマスター・初級中国語』（同学社）、『現代中国語入門』（白帝社）、《汉语速成听力 入门篇》（北京语言大学出版社）、《汉语会话301句上册》（同）の4冊について、新出語、補充語、例文や練習問題などから各使用語彙を抜き出し、

整理を進めている。

今後は、2015年に改訂された《新汉语水平考试大纲》や日本中国語教育学会編纂のガイドラインを基準とした各教科書の語彙分布を調査し、分析を行う。また、2年次における学習への接続を考慮し、中国語演習Ⅱの使用書へと調査対象を広げ、さらなる調査、分析を進める。このようにして得られたデータに基づいて、1年次終了時点で習得が求められる語彙を確定することにより、漢語水平考試（HSK）や中国語検定など各種中国語能力判定試験の資格取得への足がかりを提供する。



## 中国語教育を目指す日中対照言語研究 — 類別詞を中心に

夏 海燕 / 彭 国躍 / 加藤 宏紀

世界の言語をみると、ものの数量を言語化する際に、one apple, two cats, three journalistsのように、数量類別詞がなく、可算・不可算、単数・複数で成り立つ言語がある一方、「1つのりんご」「2匹の猫」「3人の記者」のように、類別詞の介入が必須な言語（主に東アジア・東南アジアの言語やオーストロネシア語族など）も存在する。類別詞は話者がモノをカテゴリー化するという重要な認知プロセスに関与して、言語使用者の主観的な認知や判断を反映する主観性の高い言語表現となる（Lucy1992, Imai and Gentner1993, Foley 1997, 井上1998）。

中国語と日本語には、量詞と助数詞という用語こそ異なるものの、ともに類別詞に当たる文法カ

テゴリーが存在する。両言語に共通して用いられる類別詞もあるが、意味が複雑に絡み、混乱が生じやすく、かえって習得の難点となる。本研究では、日本語を母語とする中国語学習者を対象に、習得の実態調査を行い、学習者の類別詞習得状況、誤用のパターン及び誤用を招いた要因を明らかにしたい。

2017年度は本学外国語学部中国語学科2年生から4年生を対象に、同じ課題について作文を書かせ、データを収集するという形でパイロット調査を行った。調査を通して、以下のことが分かった。まず、異なり語数からみると、学年とともに使用される類別詞の数が増えるというのが確認できなかった。また、全体的な傾向として、a. 類別

詞使用の回避（類別詞を使用すべきところに使わない）、b. 類別詞の誤用、c. 類別詞「个」の濫用が目立つ、といった特徴が観察された。今後はパイロット調査の結果をもとに学生を増やして、本調査を行う予定である。ただ、作文形式のみだと、把握しきれない類別詞もあり、日本「中国語教育学会」学力基準プロジェクト委員会に

よって作成された『中国語初級段階学習指導ガイドライン』には48の類別詞が挙げられているが、パイロット調査に現れた類別詞はその1/4にとどまる。そのため、調査手段を工夫する必要がある。また、データに偏りがないように、本学のみならず、他大学の中国語学習者のデータも収集していく必要がある。



— ◆◆ 2015 - 2017年度共同研究グループ 成果報告 ◆◆ —

## 音響機器等を利用した音声教材の試作

小松 雅彦 / 松村 文芳

近年、技術的な発達によって、さまざまな機器が従来に比べて廉価で利用できるようになってきているが、音声教育への応用は限られている。本研究では、いくつかの技術の応用について調査検討を行ってきた。

- 調音等についての動画教材の検討。教材を作成するためにNDI Wave Speech Research Systemのデータ（2014年度採取）の分析準備を行った。また、近年公開された調音や発声の動画教材についての調査検討を行った。
- 英語音声のディクテーションについての検討。システム開発としては、ストリーミングサーバを利用したディクテーション演習システムのプロトタイプ作成準備を行った。教材の検討としては、幼児向けアニメのDVDやYouTube動画を用いて、授業内で紙ベースでディクテーションを実施し、その有効性を検討した。
- 英語のプロソディ教育についての検討。「英語リズム学習における強勢タイミング提示

のための視聴覚教材」（甲南大学北村達也研究室，2015）の試用を行った。また、既存の英語音声学教材におけるプロソディの取り扱いを比較するために、市販されている教材の調査・収集を行った。

- 英語の発音の自動評価システムの検討。多人数の学生を対象に発音を評価するため、自動評価システムの導入について検討を始めた。
- 中国語CALLシステムの使用経験から、英語の音声教育との関連・応用についての検討。CALLシステムにおける波形表示に与える声調の役割の考察を行った。発話の焦点部分の中国語と英語との比較を行った。前置詞の振幅の大きさと形式意味論による論理式の意味表示とを関係づけ、前置詞の意味的な役割と教育上の重要性についての考察を行った。実際に教材を作成するためには、膨大な時間が必要で、また多額の費用がかかるものもある。実際に授業で安定的に利用できる教材を開発することを目指して、今後、さらに研究を進めていきたい。

# 言語景観に関する社会言語学的基礎研究

彭 国躍 / 尹 亭仁

今年度は、韓国語の言語景観研究に関連して、日本における言語景観が、韓国語教育に活用できないかを具体的に検討している。その一環として横浜駅で採集した基本語彙、とりわけ「東」「西」「南」「北」という方角を表わす単語の提示の仕方とその活用について模索している。<図1>は、大きい駅ではよく目にする「東口」と「西口」の案内表示である。日本語ではいずれも訓読みである。韓国語では、「東口」が「동쪽 출구」、「西口」が「서쪽 출구」であり、日本語に訳すと「東側の出口」と「西側の出口」になる。

この1枚の写真から頻度の高い4語（東、西、出、口）と韓国の固有語1語（岻）の応用が可能である。「東」は2200字の漢字の中で日本での使用頻度順25位、「西」は342位、「出」は11位、「口」は133位である。韓国語の初級及び入門の授業では、<図1>を提示し、「東西南北」を教えている。日本語と違って韓国語は音読みのみなので「東西南北」に対応する「동서남북」を覚えてもらう。韓国の固有語の「岻」は発音が難しいため、初級レベルには出てこない単語であるが、<図1>の案内表示から容易に提示できるようになった。手書きで書かれているのは、「왼쪽(左側)」と「오

른쪽(右側)」であり、「岻(側)」を応用した単語である。

<図2>と<図3>は色の学習に用いられる信号号である。従来は「青信号」「黄色信号」「赤信号」から色の学習を促したが、<図1>を併用することにより、「左(側)に青信号があります」「右(側)に赤信号があります」の学習に役立っている。

11位の「出(출)」は、「出発(출발)」「出入(출입)」「出身(출신)」「出国(출국)」など、主に中級レベルのテキストに出てくる漢語の導入に用いることができる。133位の「口」は日本語にはない、家族の意味を持つ「식구(食口)」や「입구(入口)」「창구(窓口)」等の単語の学習に応用できる。

中国語の言語景観研究に関しては、すでに「近代上海言語景観の生態学的類型」「上海の都市形成期における言語景観」と「百年前頃の上海の言語景観の記述研究」という3つのテーマに関する論文を完成し、現在「消えた上海の歴史言語景観（1）一閉鎖型店舗の映像データの記録」というテーマでデータの収集作業を行っている。



<図1>東口・西口



<図2>青信号と左側



<図3>赤信号と右側



## 【 新入社員紹介 】

### 中国語学科

まつうら さとこ  
**松浦 智子** 助教

専門は中国の古典通俗文芸で、おもに通俗歴史小説の形成過程に関わることを研究しています。「物語」と「歴史語り」の親和性の高さは古今東西よく見えるものですが、『三国志演義』や『水滸伝』など日本でも有名な作品も、三国時代や北宋時代の歴史的な事跡が長いあいだ語り継がれる中で、次第に娯楽化して形成されてきた通俗歴史小説です。また、これら中国の通俗歴史小説の生成過程には、エスニック集団、権力集団、宗教集団、軍事集団、宗教…などさまざまなカテゴリー・集団の思惑が複雑に絡みついています。これまで、とくに『楊家将演義』という北宋の武将一族の事跡をもとにした作品を中心に、そうしたものを解きほぐす作業をおこなってきましたが、文学領域の文献資料だけでは足りないので、時に、歴史や美術、哲学分野の方々とともに、中国の山奥で石碑や墓などを調査したりもしてきました。力不足で四苦八苦していますが、今後は通俗文芸というソフトパワーが中国や東アジアの社会・文化に与えた影響も読み解いていければと考えています。

.....

### 英語英文学科

ふるや こうへい  
**古屋 耕平** 准教授

四月より外国語学部英語英文学科に着任しました古屋耕平と申します。主に十九世紀のアメリカ文学、特に十九世紀半ば、アメリカ文学が花開いた「アメリカン・ルネッサンス」と呼ばれる時期の文学作品を研究しています。アメリカの作家や文学者たちが、イギリス文学・文化の影響力を逃れ、独自の国民文学・文化を作り上げていく過程で、ドイツやフランスを始めとするヨーロッパの文学作品を移植・翻訳し、それらを換骨奪胎しながらアメリカ文学の独自性を意識的に作り上げていった過程を研究しています。これまでの研究では、特に翻訳の問題についてアメリカの文学者たちがどのように語っているかということに注目し

てきましたが、私自身の語学力不足で、実際のヨーロッパ諸言語の原文と英語翻訳の詳細な比較研究にまでは踏み込んでいませんでした。神奈川大学外国語学部には各国語の専門家が大量いらっしゃいますので、先生方に教えていただきながら、少しずつでも研究を進めたいと思っています。(できるならば自分が学生になりたいぐらいです。)

.....

### 国際文化交流学科

**サルブラン シモン** 助教

#### 社会学としての憲法学比較論

私の研究テーマは、戦後の日本憲法学である。ただ、それを法学的で見ると、日本の「戦後思想」として考えている。特に、日本憲法学がどのように立憲主義の理想に立脚して、啓蒙的な役割を演じたのかに興味がある。日本の憲法学者は、学説によって日本の民主化と法律の合理化のために、立憲主義の理想を国家の指導者と国民に伝えようとした知識人となった。その意味では、憲法学は、近代日本の国家建設のために一役を演じた。

その視点のため、私の研究は、法学の専門知識、法哲学、社会学、哲学を用い、フランスの憲法学と日本の憲法学の橋渡しという役割を果たそうとする。現在、日本語を読めるフランスの憲法学者はいない。そのため、フランス憲法学者は日本の憲法学を日本人の憲法学者の媒介でしか知ることができない。私の存在は、お互いの理解を深めるため、フランスの視点から日本の憲法学を理解し、日本人憲法学者とフランス人憲法学者によるフランスの憲法事情についての議論に「鍵」を与えたと思っている。そして、フランスとヨーロッパの「憲法学思想」を広く目を向けて、日本の憲法に限らずに、比較することに取り組んでいる。

.....

### 英語英文学科

なかごめ さちこ  
**中込 幸子** 助教

大学一年の時に翻訳の仕事をはじめ、今年で翻訳歴28年目になります。小学校時代を北米で過

ごし、中高大学時代は「英検オタク」と呼ばれる程、英語の勉強に集中したため、大学から語学力があり、その後は各ジャンルの特徴や専門分野を学ぶことに集中しました。大学時代は輸入服飾品店のためのビジネス文書、大学卒業後はNHKの放送原稿、朝日新聞で新聞記事、日経新聞では経済・金融記事を英訳。一般の翻訳会社に登録後、年次報告書、プレスリリース等を英訳。その都度、On-the-job trainingで各分野の特徴を学びました。

2014年度から翻訳演習を色々な大学で教えていますが、毎年葛藤です。翻訳のコツは教えても、語学力が完璧でないプロの翻訳家や通訳者にならないので、学部生にはまず翻訳・通訳のテクニックを通じ、楽しく英語を勉強し、言葉をミクロのレンズでもてらうことにしています。来年度から担当する専門研究とゼミでは翻訳作品の分析を通じて、言葉のニュアンスに興味をもってもらいたいです。

.....

#### スペイン語学科

くろだ ゆうが  
**黒田 祐我** 准教授

私は中世イベリア半島で展開した「レコンキスタ」の諸相を分析しています。711年から1492年までの約800年間、キリスト教徒社会とアンダルス（イスラーム・スペイン）社会とのあいだには、非常に複雑な関係が築かれていました。これを血なまぐさい宗教戦争とひとくくりにはできません。近年は、アンダルスが滅亡しようとしている時代（13世紀～15世紀）の国境地帯で暮らす人々の振る舞いを、「戦争と平和」という視角から分析してきました。今後はより広い展望をもって、キリスト教徒・ムスリム・ユダヤ人からなる当時の「中世スペイン人」が、地中海世界をまたにかけて活躍するさまを明らかにしていくつもりです。

ところでこの時代は、政治行政の面でも文学の面でも、中世ラテン語から現在のカステイリャ（スペイン）語、カタルーニャ語といった俗語を使用するようになる過渡期です。ラテン語の直系子孫でありながら、アラビア語の影響を強く受けつつ、さらに半島の諸地域ごとに異なる展開をみ

せていく中世イベリア半島の言語状況を、歴史的な視点を加えながら検討するのも興味深いのではないかと思っています。

.....

#### 英語英文学科

#### エリック アラン ラーストロム 助教

Greetings, my name is Eric Lerstrom. I have been living in Japan for ten years and teaching at Kanagawa University for five.

I became interested in English as a child. My family moved several times for my father's job. In elementary school, I noticed how English is spoken differently in different regions. Like many children I liked Coke. Where I was born, all drinks similar to Coke were called "coke." Coca-cola, Pepsi cola, Sprite, and all others - brand didn't matter, everything was coke. In my next home, these drinks were called "soda." In the next town, they were called "pop." These regional differences fascinated me and I loved to read and listen to regional dialects and foreign accents. I loved learning differing idioms and usage for common words.

This led to my interest in vocabulary and idioms. I have been studying the effectiveness of different teaching methodologies as well as the effectiveness of the vocabulary studied. While "a bird in the hand is worth two in the bush" might be more interesting to learn and difficult to understand without instruction, students would be better served learning idioms that they are more likely to encounter in their lives.

I am also interested in curriculum development using the backward design framework. By first deciding what the goals and expectations for the students are, we can then better understand how to measure the students' progress and what classroom activities will be most effective to assist the students in reaching those goals.

## 動詞の意味拡張における方向性

### —着点動作主動詞の認知言語学的研究—

中国語学科 夏 海燕 著



言語表現を見ていくと、面白い現象が観察される。我々はお茶も要求も「飲み」、飯もパンチも「食い」、飴も辛酸も「舐める」ことができる。このように、一つの動詞がその意味によって、飲食物と抽象物という異なる種類の目的語を取ること

ができる。認知意味論では、このような多義語の複数の意味間に拡張・派生関係が存在し、そこに認知的要因に基づいた非恣意的な一方向性が指摘されている。本書は認知意味論の手法を用いて、「着点動作主動詞」と本研究が呼ぶ一連の動詞および意味的に関連のある動詞の意味拡張を取り上げ、意味拡張や文法化における方向性及び写像の実現可能性について研究するものである。

日本語、中国語、韓国語をはじめ、一部の動詞は意味評価上中立な基本義が、意味拡張に伴いネガティブな意味合いを帯びるといふ興味深い現象が観察される。例えば日本語の「みる」は視覚動詞として使われる時、「テレビをみる」「景色をみる」のように特定の価値判断と結び付かず、中立的であるが、意味拡張に伴い、<ある出来事を経験する>という意味で使用される際は、「憂き目・痛い目・ひどい目・辛い目・いい目をみる」や「ばか・泣き・恥をみる」のように、ほとんどの用例が被害性を帯びている。類似する拡張経路を辿る動詞は「みる」の他にも、「(被害を)こうむる」「(罪を)背負う」「(借金を)抱える」「(災いを)招く」

「(反感を)買う」「(支障を)来す」「(パンチを)食らう」などが観察される。「買う」「食う」のような動詞は、他動詞でありながら<動作主が対象に働きかけること>によって、動作主の身体または領域が着点となる事物の移動が起こり、動作主が動作の影響を受ける>という<動作主向けの使役移動(AGENT-DIRECTED MOTION)>を備え、本書ではこのような動詞を「着点動作主動詞」と呼ぶ。日本語・中国語・韓国語・英語・ロシア語・インドネシア語などの多言語データをもとに議論を展開し、これらの動詞に<自分の領域へのモノの移動>というイメージ・スキーマによって、<不快な経験をする>という意味拡張が起きることを示す。さらに、このような拡張方向を引き起こした認知的メカニズムを、社会心理学、神経心理学などの観点から説明する。

一方、「批判を買う」と「批判される」、「足止めをくう」と「足止めされる」のように、着点動作主動詞が受身文との平行性を示している。中国語をはじめ、言語によっては着点動作主動詞の一部が<不快な経験>へという意味拡張にとどまらず、さらに受身標識または受身を表す接尾辞へと文法化するという現象が観察される。本書において、主に中国語の受身標識に焦点を当て、着点動作主動詞から受身標識へという意味変化の普遍性およびその動機を明らかにする。

本書の研究成果は、語彙の意味変化という記述的な側面、そしてメタファーの写像、概念化における身体性基盤、言語変化の規則性、予測可能性といった理論的な側面に貢献できると考えられる。さらに、辞書、また教科書などの編集、教育現場への応用を切に願っている。

## 『現代中国語の意味論序説』の刊行とその発展

中国語学科 松村 文芳 著



1994年4月に神奈川大学外国語学部中国語学科に赴任して直面した問題は中国語を専攻する学部生、三・四年生に「中国言語特講」をどのように講義するかということであった。最初に使

用したテキストは評価の高い文法書であったが、学生から「テキストの内容をそのまま教えてもらっても新鮮みがない」という不満が出た。そこでテキストは変えず、講義は内容を前任校で8回ほど国際漢蔵語学会（米国の大学教員の組織）に提出して読み上げた英文の論文を日本語になおして行うことにした。この当時はまだ研究の理論的枠組みが定まっていなかったので記述言語学の手法で小説やラジオ番組の中国語を調査して自説を中心に論を展開した。英文の論文の利点は曖昧性がないこと、論理的でなければ受け入れてもらえないことであるので講義に用いるには便利であった。

それ以後は学生の不満を耳にすることはなくなったが、講義内容に対して担当者である小生がストレスを感じるようになった。客観的な内容にするために形式や言語資料にこだわって意味の説明が十分でないことに気づいたのである。前任校での二回の米国在外研究の後半は週12コマの授業を聴講して言語学科の主要科目の大枠を勉強したが、その中で「形式意味論入門」と「形式意味論応用」の聴講から得るところが大きかった。同

時に小生のホストの先生が担当する「コンピュータ言語学」と「コンピュータ言語学応用」の中で学習した技法が後の研究の支えとなった。そこでこれらの研究を講義内容に反映しようと意識するようになった。

その結果テキストをより論理的な内容を有する『文法講義』に変更し、その統語的説明を意味論の視点から捉え直すことにした。情報数学、論理学、英語意味論、記号論理学の諸著作から発想、手法を拝借し、それらの研究成果に負うところが多いが、最大の成果は言語研究センターのCALL教室で講義し、板書することによって学生、院生と議論することができたことである。前任校では十分な研究時間が保証され、それ相応に研究成果もあがったが、その発表に対するフィードバックが存在しなかった。講義日の前夜まで鉛筆と消しゴムで格闘する日々がいかに貴重であるかを実感している。

最後に本書の内容を発展させた論理式を紹介しておこう。「我是昨天進的城。（私は昨日町に行ったのだ。）」という文はこの文の成立過程を示すと「進’（我，城）&有’ {進’（我，城），了}」が格役割演算を「&有’（了，ET）&<’（ET，RT）&=’（RT，昨天）&<’（昨天，ST）」が時間点演算を「&有’（ST，的）&有’（的，[様相]）&有’（[様相]，断定）」が様相演算を「&有’（断定，[焦点]）&有’（[焦点]，昨天）」が焦点演算を表し、論理式の全体はこれらの式を順に連結すると完成する。連言（&）の前後の命題の項の間に連鎖関係が存在することが重要であり、これがなければ何の価値もない式になる。（完）